

# 偕行現代考

## 外国人労働者問題

柴田 幹雄 陸自75

地雷処理NGOの現地代表としてプノンペンで2年間勤務した。その間、訪問者の送迎でプノンペン空港には何度も行く機会があった。成田直行便は夜遅い時間だったから21時ころ行くことが多かった。

毎回驚くことに空港ロビーのある建物の前の駐車場に、何百人という人があふれ、たむろしている。どちらかというと質素な服装のおじさん、おばさんが多い。聞いてみると韓国へ出稼ぎに行く若者を見送りに来ているとのこと。見送りの人は空港ロビーに入れないので駐車場あたりで別れを惜しんでロビーへ送りだす。カンボジア人は家族の結束がよいから両親から親戚まで来ているのだろうか？ それにしてもすごい数である。

カンボジア政府の集計では、現在韓国に約5万3000人のカンボジア人労働者がいるという。韓国は1990年頃から労働者不足により、研修制度をはじめ各種制度を拡充し製造、建設、畜産、サービス業などの業種に門戸を開放している。

私が勤務していたNGO事務所には

警備会社から派遣された青年が常駐していた。なかなかの好人物で事務所の一員として仲良くやっていったのだが、彼は韓国に働きたいといろいろ勉強し、試験を受けて韓国へ向かった。韓国は外国人労働者受け入れの制度が整っているとはいえ、外国人特にアジア人に対する感情が良い国とは言えない。彼がどんな仕事についているかは聞きそこなつたが、幸せに暮らしていることを祈るばかりである。

朝鮮半島情勢が緊迫したときフンセン首相も現地在住の自国民を気にして、「半島では100%戦争は起こらない。私が言うのだから大丈夫、心配するな」と述べた記事が出ていた。カンボジアは軍用機を飛ばして自国民輸送をすることもできないだろうから、首相もそう言うしかなかったのだらう。

別の記事では、カンボジアから海外へメイドを出すことも出ていた。若い女性をマレーシアや香港などへ1000人派遣するという事業である。香港では労働環境も整い安全で、無料の宿泊施設、食事も保証しているとのこと。しかし工場労働などと違い、女性が他人の屋敷などに入つての仕事だから言葉の問題以外にも苦労が多いだろう。しかし月収550ドルという高収入で希望者は多いらしい。以前別の国へメイドとして行つたが、性的な嫌がらせ

もあつて帰ってきた女性が、収入のため今回また応募するというインタビュー記事もあつた。派遣メイドの勤務環境を守るため、事前教育で理不尽な要求の断り方を教えたり、全メイドに携帯電話を持たせ、また彼女たちの緊急事態に応じて援助をする要員を派遣先国に配置するなどの対策をしている。いずれにせよ、外国で仕事をする苦勞がしのばれる。

日本でも最近、コンビニのレジや飲食店などでかなりの外国人が働いている。医師や弁護士のような専門職以外で働いている外国人はほとんどが技能研修生か留学生のアルバイトである。技能研修生は従来、研修というより低賃金の単純労働者扱いをするような違法に近いケースもあつた。

昨年末、日本の出入国管理及び難民認定法などの一部が改正された。これにより、日本語や仕事に必要なスキルがあると認定されれば就労資格(1号)が与えられ労働者として最長5年間滞在できる。またさらに高い就労資格(2号)が認められれば、家族を帯同し滞在期間の延長も認められる。今以上に外国人労働者がふえ、実態上の移民受け入れではないかという危惧も言われている。日本のような民族性にかなり均一性の高い社会に異質な外国人労働者が今以上に入ってくることに不安を覚える人も多いだろう。

しかし産業界の各業種で人手不足は深刻であり、外国人を受け入れざるを得ず法改正がなされ、4月から施行されている。実際の受け入れのための具体的制度や仕組みはこれから経験を積みながら日本社会が作っていくのだから、少なからず摩擦もあるだろう。受け入れる側としての苦勞もある。

一方来日する外国人労働者たちの苦勞もある。王立プノンペン大学には日本語課程があり私立の日本語学校もある。日本へ就労希望または日系企業に就職を希望する若い人たちはお金を出して真剣に日本語を勉強している。さらに実際に日本へ渡航する前に、日本で暮らせるよう文化や風習を教える渡航支援会社もある。プノンペン空港に集まっていた、韓国へ行く若者の見送りをする家族を見ると、日本へ来る若者の後ろにもやはり、涙ながらに送りだした大勢の家族がいることを思わざるを得ない。アメリカンドリームをかむため米国へ移住した人たちのように、多くの人たちが各国からジャパンドリームを夢見て日本へ来る。彼ら彼女らが日本の産業界に貢献しつつ、安全にかつ幸せに働き、満足して生活できるようになってほしいと思う。日本人と良い関係を築けるよう我々も前向きに彼らを受け入れたい。